

ひまわり



令和3年9月14日(火)

オリパラを終えて

9月5日、夏季パラリンピック東京大会が閉幕しました。オリンピック同様、1年延期の大会となりましたが、13日間の熱い戦いは、私たちに感動と元気を与えてくれました。

この大会には、障がいのある約4400人の選手が世界中から参加しました。各選手は、それぞれの競技で、これまでの努力の成果を存分に發揮していました。障がいがあっても、トレーニングや工夫次第で、その人の持つ個性や能力を發揮できることを、目の当たりにした大会でした。

それは、多様性を尊重しあう「共生」を掲げた大会そのものでした。閉会式で、“Harmonious Cacophony”（「調和のとれた不協和音」→「違いが輝く世界」）がテーマになっていたことは、とても納得のいくものでした。

今回のオリパラは、ともに私たちが経験したことのない新型コロナのパンデミック下で大会でした。開会前から、開催そのものに多くの反対意見がありました。オリンピックが閉幕し、パラリンピック開幕時点でも、開催反対の意見が多くありました。感染拡大防止の観点では、開催への反対は一概に否定できません。

しかし、「できない」ということばかりに視点を置いてしまうと、「できる」ものもできなくなってしまう恐れがあります。困難な中でも、可能性を追求することの大切さを感じました。

また、オリパラとともに、複雑な社会背景を抱えて出場している選手がいました。例えば、難民選手団です。内線などで、祖国を逃れた選手たちです。難民選手団以外に、開催期間中に亡命した選手もいました。彼らには、国に帰ると身の安全が保障されないなどの理由がありました。世界を見渡すと、私たちが知るべき現実がまだまだあります。平和に祭典としてのオリパラは、このような現実も浮かび上がらせてくれました。

今回のオリパラをきっかけに、世界中の国が国益を超えた絆を深め、平和な世界の実現に一歩でも近づいてくれることを切に願いたいものです。

図書室 一新刊の案内一 (4冊ご寄贈いただきました)

「盲目魂！ 生きててみえたもの」 福本 淳（ふくもと きよし）著

著者の福本さんは視覚障がい者です。子どものころは弱視という状態で、大学生の時に失明しました。この本では、福本さんのこれまでの人生を振り返るとともに、今を、そして未来をどのようにいきるか、ということが書かれています。そして、視覚障がいがありながら、チャレンジ精神を貫いてきた福本さんの生き方に感銘を受ける、中学生に読んでほしい一冊です。ちなみに、福本さんは本校の保護者です。

福本 淳さんについて

音楽家、CDアルバム「小さな出逢いから」、「未来のために」など

各地でコンサートや講演活動、障がい児（者）向け音楽教室を運営

Youtubeは「福本 淳 チャンネル【音楽・暮らしルーム】」（とても素敵です！）

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。

